

# BIRD RESEARCH NEWS

## 2015年3月号 Vol. 12 No. 3

活動報告 ガンカモ, シギ・チドリ調査のまとめが出版されました

活動報告 調査研究支援プロジェクト 支援結果のご報告

参加型調査 シギ・チドリ類の調査

生態図鑑 コクガン

図書紹介 ツバメの謎

お知らせ ツバメと人の共存プロジェクト



Photo by Yoshiro Watanabe

## 活動報告

### モニタリングサイト1000

### ガンカモ, シギ・チドリ調査のまとめが出版されました

神山和夫・守屋年史

2004年から始まったモニタリングサイト1000のガンカモ類とシギ・チドリ類の調査は、全国の調査員の皆さん、バードリサーチ、環境省生物多様性センターが共同で実施する市民調査です。バードリサーチが関わっているガンカモ類とシギ・チドリ類調査も開始から10年が経ち、この間に蓄積されたデータを解析した報告書が公開されましたので、その内容をお伝えします。

### ガンカモ類

#### ● 個体数の増減傾向

2004/05～2012/13年の秋期(9-11月)・冬期(12-1月)・春期(2-5月)について個体数変化を分析したところ、マガンは中継地の長都沼(北海道)や日本海側と太平洋側の越冬地の多くで、いずれの季節も増加傾向にあり、減少傾向を示したのは化女沼(秋期)だけでした。一方、亜種オオヒシクイは北海道の中継地で秋と春に減少傾向にあり、越冬地では最上川河口など2カ所で増加傾向にありましたが、統計的に有意な傾向のあるサイトは少数でした。コハクチョウは越冬期に、最大の越冬地である新潟の複数のサイトで増加傾向を示しました。オオハクチョウは渡り時期・越冬期ともに増加傾向と減少傾向のサイトが拮抗しており、全体の傾向ははっきりしませんでした。カモ類では、ホシハジロが越冬期と渡り時期の双方で減少しているサイトが多いことがわかりました(図1)。ホシハジロはガンカモ類の生息調査(ガンカモ一斉調査)でも減少傾向を示しており、注意が必要な種です。ヒドリガモは越冬期の関東以西と、春

の渡り時期の関東以西・北海道で増加しているサイトが多く見られました。本種は冬期の北海道にはほとんど生息していないため、越冬地と渡り中継地の両方で増加が見られたこととなりますが、秋の北海道では増加を示すサイトがありません。個体数の増減以外にも、渡りのタイミングが変化しているなどの可能性もあります。

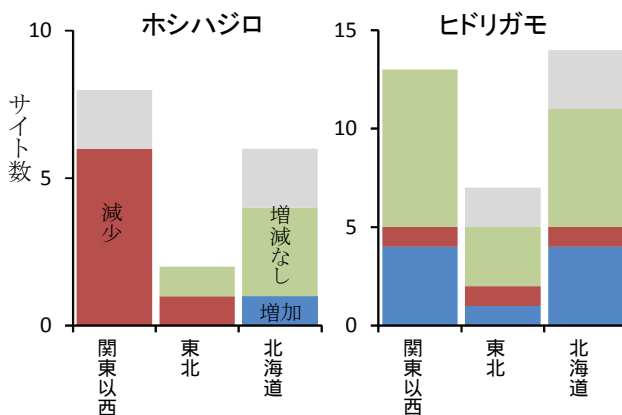


図1 ホシハジロ(左)とヒドリガモ(右)の秋期(9-11月)個体数の増減傾向。縦軸はサイト数。青は増加、赤は減少、黄緑は有意な増減なし、灰色は傾向不明。

#### ● 新たにラムサール条約基準を満たすサイト

ラムサール条約では、絶滅危惧種や個体数を基準として、国際的に重要な湿地を登録しています。ガンカモ類調査サイトのうちラムサール条約登録地は22カ所ですが、それに加えて新たに31のサイトが基準5(定期的に2万羽以上の水鳥を支える湿地)または基準6(水鳥の一つの種または亜種の個体群の個体数の1%を定期的に支える湿地)を満たしていることがわかりました。基準2(レッドリスト種が存在する)を満たすサイトはさらに多いのですが、今回は評価を行いませんでした。

# 活動報告

## ● シジウカラガンとハクガンが増加

レッドリスト種では前述のようにマガンが増加している他、近年増加が著しいのはシジウカラガンとハクガンです。どちらもかつては日本への渡来が途絶えたことがありますが、国際的な個体数回復の取り組みが行われたことなどから日本へ渡る個体群が復活したようです。図2は1地点で記録されたシジウカラガンの最大個体数の変化です。モニタリングサイト1000はサイトによって調査日が異なるため総個体数を調べることはできませんが、本種はまとまった群で移動しているため、この数字が個体数増加の目安になるでしょう。

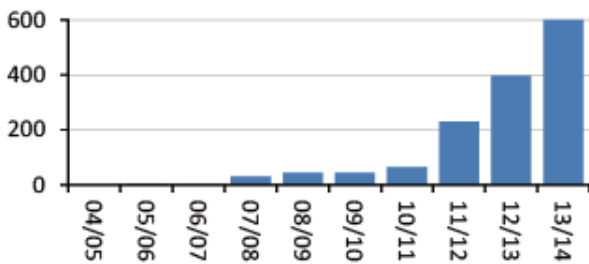


図2 各年に一地点で記録されたシジウカラガンの最大個体数。

## シギ・チドリ類

### ● シギ・チドリ類の増減傾向

シギ・チドリ類調査は、モニタリングサイト1000が始まる以前から全国の干潟を調査し続けてきた歴史がありますが、今回は各種の増減傾向を2000年～2012年までの春期(4-5月)、秋期(8-9月)、冬期(12-2月)の3シーズンについて、階層ベイズモデルという手法を使って分析しました。分析できた40種のシギ・チドリ類のうち、シーズン別に有意な傾向のあった種を表1に示しました。注目されるのは、シロチドリが3シーズンで減少傾向を示していることです。さらに、まとまった個体数が確認される時期のコチドリ、ダイゼン、ムナグロ、タシギ、キアシシギ、キョウジョシギ、ミユビシギの減少傾向も気になるようです。

意外だったのが、アカアシシギ(春期)、ツルシギ(秋期)

表 シーズン別の増減傾向が確認されたシギ・チドリ類

	増加傾向	減少傾向
春期	コチドリ、オオメダイチドリ、オグロシギ、アカアシシギ、コアアシシギ、キアシシギ、イソシギ、アカエリヒレアシシギ	ダイゼン、シロチドリ、チュウジシギ、タシギ
秋期	セイタカシギ、ツルシギ、コアアシシギ、クサシギ	ダイゼン、コチドリ、シロチドリ、オソリハシギ、チュウシャクシギ、キアシシギ、キョウジョシギ、オジロトウネン、アカエリヒレアシシギ
冬期	イカルチドリ、ミヤコドリ、イソシギ	ムナグロ、シロチドリ、ミユビシギ、トウネン、エリマキシギ

の増加傾向です。水田、ハス田、湿地などでよく観察されていましたが、近年その環境は乾燥化しつつあり、動向が懸念されています。実際2008年ぐらいからは減少傾向を示しており、今後もモニタリングしていくことが必要です。また忘れてはいけないのは、この分析は最近10数年の動態ということです。増加傾向が示されている種にも、1970年代頃に比べれば大幅に減少している種があり、彼らの動態は水辺の環境変化に左右されています。

### ● ラムサール基準からみた調査地

ガンカモ類と同様にラムサール条約湿地の基準にどれぐらい当てはまるかを判定しました。シギ・チドリ類が関係する基準は2つあります。基準2(IUCNの絶滅危惧種が定期的に渡来している)と基準6(2008-2012年間の個体数の平均が、東アジア推定個体数の1%以上である)です。

絶滅危惧種では、ヘラシギ、カラフトアオアシシギ、オバシギ、ホウロクシギの定期的な渡来地が確認されました。また、シギ・チドリ類以外の干潟の絶滅危惧種クロツラヘラサギとズグロカモメも特に九州では定期的な渡来地となっている調査地が最近増えてきています。また個体数では、ダイゼン、ムナグロ、メダイチドリ、ミヤコドリ、キョウジョシギ、ミユビシギ、ハマシギ、キアシシギ、チュウシャクシギ、クロツラヘラサギ、ズグロカモメが基準値を越え、これらの種を支えている調査地があることがわかりました。結果、ラムサール条約登録の基準をクリアした新たなサイトは、59調査地もありました。しかしながら、ラムサール条約登録のためには地元の理解や保全の担保など、行政的や地域的な理解が必要です。ひとつでも多くの保全地域が生まれることが望まれます。

### ● それぞれの調査地

約140ある調査地ごとに、観察されたシギ・チドリ類の増減傾向を2000年～2012年までの最大個体数の合計を利用して分析しました。3シーズンとも有意な増加を示したのは、吉野川下流域(徳島)、白川河口(熊本)、氷川(熊本)の3つの調査地、3シーズンとも有意な減少を示したのは、東京港野鳥公園(東京)、多摩川河口(東京・神奈川)、伊川津(愛知)、愛西市立田(愛知)、博多湾東部-和白・多々良(福岡)の5つの調査地でした。

大都市周辺の調査地に減少傾向がみられ、都市部の水辺の利用のしかたや、環境などが変化しているのかもしれない。しかしながら、生息環境の消失という致命的な要因のほかは、シギ・チドリ類の動態については、不明な点も多く、また国内だけの要因とも限りません。東アジア各国との連携を図りながら、水鳥たちの状況を良い方向へ向ける必要があると考えています。

#### ■ 生物多様性センター

##### モニタリングサイト1000 ホームページ

● ガンカモ類調査 第2期取りまとめ報告書 [24.6MB]

<http://bit.ly/1yrTmlh>

● シギ・チドリ類調査 第2期とりまとめ報告書 [32.2MB]

<http://bit.ly/1yrTwsO>

# 活動報告

## 調査研究支援プロジェクト 2014年度支援結果のご報告

高木憲太郎

バードリサーチ調査研究支援プロジェクトへのご協力、ありがとうございました。3月25日にその投票結果がまとまりましたので、ご報告いたします。たくさんのご投票とご寄付をいただき、本当にありがとうございました。今年度は2012年度の200票を上回り、231票のご投票をいただきました。また、支援総額も過去最高となる715,000円が集まりました。このうち2割を8件の調査・研究プランに均等割りで分配し、8割を得票数に応じて分配して、各調査・研究プランへの支援額を確定しました。

今年度は、全国鳥類繁殖分布調査を環境NGOが環境省などの協力のもと前面に立って実施して行こう、という取り組みを始めたこともあり、この調査をバードリサーチからの調査研究プランとして出ささせていただきました。この調査は20年に一度となる大事業ですが、鳥の調査に関わる多くの方々にご賛同いただき、ご投票とご寄付の受け付けを開始した当初から票が集まり、得票数1位をいただきました。皆さんのお気持ちに伝えるべく、努力したいと思います。得票数の状況は、随時ホームページでお知らせしてきました。2位は終盤まで「ヒバリ 秋のさえずり解析!？」が維持しており、「オオタカにおける繁殖適地環境の段階的評価

モデルの構築」,「クロジは富士山北麓のどこで繁殖しているのか?」,「御食事処 川鶉~カワウが作り出すサギ類の採食機会~」が激しい3位争いを繰り広げていましたが、最後に「御食事処 川鶉」の猛追があり、なんと、1票差で2位に躍り出るという結末になりました。繁殖分布調査の得票数は37票と、昨年度の1位より1票少ない結果でしたが、デッドヒートを繰り広げた2位以下の得票数が多かったため、総投票数が昨年度を上回ったようです(図)。会員の皆様にメールやニュースレター、年報をお送りした際にパンフレットを同封させていただいたほか、メーリングリスト、Twitter、Facebookでも呼びかけを行ないました。また、支援先の研究者の方で希望された方には、パンフレットをお渡しして、周りの方に配っていただいたほか、多くの方にクチコミで宣伝していただきました。ご協力いただいた皆さまに深くお礼申し上げます。

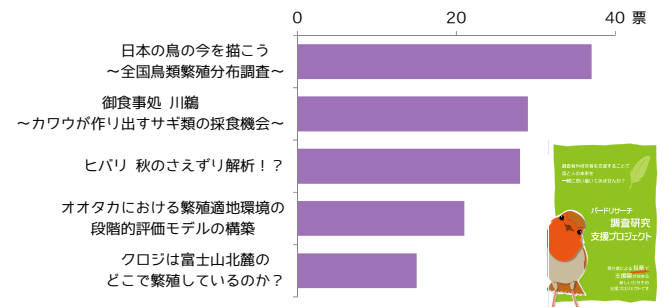


図. 上位5位までの得票数

## 参加型調査

### シギ・チドリ類の調査

守屋年史

#### 4年目もやります季節前線シギ・チドリ

今年の春も季節前線シギチドリを行なっています。昨年は、全般に、2013年より早い傾向があり、2012年とよく似た渡来状況でしたが、4月終盤に渡来する種では、北海道東北部への到達に時間がかかっており、気象の影響により少し北進のブレーキがかかったと考えられました。気象や地形など渡りにどんな影響があるのか、事例を集めて分析していきたいです。また、それぞれの種の渡り順序も徐々に判明してきました。そこで今年度は、対象種のメダイチドリ、ムナグロ、キョウジョシギ、トウネン、アオアシシギ、キアシシギ、チュウシャクシギに、オオソリハシシギを加え8種としました。マイフィールドに出かけた折に、これらのシギ・チドリ類が初見参していましたら、ご報告いただければ幸いです。



写真 オオソリハシシギ

■ 季節前線シギチドリ ホームページ  
<http://bit.ly/1ys0kXq>

### シロチドリ繁殖状況調査

1面記事でも言及したように、モニタリングサイト1000第2期まとめでも、シロチドリは3シーズンともに減少傾向が認められた唯一の種になっています(図)。そこで昨年に引き続きシロチドリの調査をおこない、繁殖状況の情報収集をします。生息する場所の環境の情報を収集し、生息するために必要な条件や阻害している要因を探っていきたいです。具体的には、砂浜の広さや植生、人の立ち入りの頻度の情報を集めるとともに、天敵となる生き物(カラスや散歩する犬などの報告があります)、またコアジサシの営巣や生息の有無などもご報告いただけると幸いです。調査によって、最終的に効果的な保全対策が提案をおこなって行きたいと考えております。ご協力よろしく申し上げます。

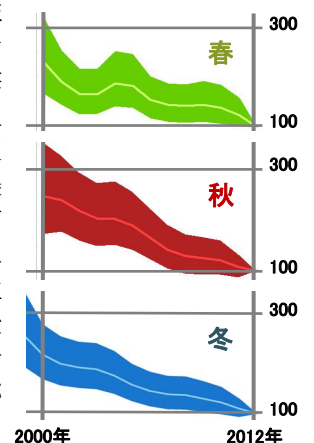


図. シロチドリの最大個体数の全国総計を用いた個体数の指標の変化(2000年~2012年:冬期は1999年~)2012年を100とした階層ベイズモデルによる分析。

■ シロチドリ繁殖状況調査 ホームページ  
<http://bit.ly/1yscPm>

# コクガン 英: Brent Goose 学: *Branta bernicla*

## 1. 分類と形態

分類: カモ目カモ科

全長: 560-637mm  
 尾長: 90-120mm  
 ふ蹠長: 56-66mm  
 ※榎本佳樹(1941)による。

自然翼長: 300-349mm  
 露出嘴峰長: 30-36mm  
 体重: 1167-1827g

### 羽色:

雌雄同色。全身暗色だが、頭部から頸部、胸部の羽毛は特に黒い。頸部に首輪状の白い部分があり、その中に黒い斑がある。体上面は淡い暗褐色。体側面から下面にかけて淡黒褐色と白の縞模様が入る。下腹部から上尾筒・下尾筒は白い。嘴や後肢は黒い。幼鳥は成鳥の黒色部が暗褐色であること、頸部の首輪状の部分がないか不明瞭であること、雨覆の羽縁に白い斑が出ることで識別できる。



写真1. コクガン。成鳥(上)、第一回冬羽(中)、幼鳥(下)。

### 鳴き声:

カエルの鳴き声のような、グルル、グワワと聞こえる濁った声で鳴き、比較的遠くからでも聞こえる。飛翔中はマガンと比べるとやや甲高い声でクオンクオンと鳴く。

## 2. 分布と生息環境

### 分布:

世界全体で約50万羽が生息すると推定されている。コクガンの亜種と分布については議論が分かれ、流動的な状況にある。日本鳥類目録改訂第7版(2012)では日本に渡来するのは亜種コクガン(*B.b.orientalis*)とされているが、亜種コクガンはIOC(国際鳥類学会議) World Bird List Ver. 5.1 (<http://www.worldbirdnames.org/ioc-lists/master-list-2/>)には記載されておらず、日本に渡来するのは亜種クロネズミガン(*B.b.nigricans*)とされている。亜種クロネズミガンはロシアのLena川より東側の東シベリアから北米アラスカ、西部カナダの北極圏で繁殖し、13万~14万羽生息すると推定されている。北米西岸からメキシコにかけて越冬しているが、シベリア極東部の個体群は北米西海岸と日本を含めた東アジアへ2方向に分かれて渡るとされており(Syroechkovskiy 2006)、亜種コクガンはこの東アジアに渡来する個体群を指すと考えられる。日本や韓国、中国などの東アジアで越冬する亜種コクガンは6,000~1万羽と考えられている(Syroechkovskiy 2006)。他に、ロシアのTaimyr半島からkara海の北極沿岸に沿って繁殖し、主にヨーロッパで越冬する亜種ネズミガン(*B.b.bernicla*)が18万~26万羽、スバル諸島とグリーンランド、東部カナダ北極圏で繁殖している亜種シロハラネズミガン(*B.b.hrota*)が10万

~13万羽いると推定されている。ロシアの研究者を中心に亜種クロネズミガンと亜種ネズミガンを別種とする説もある。

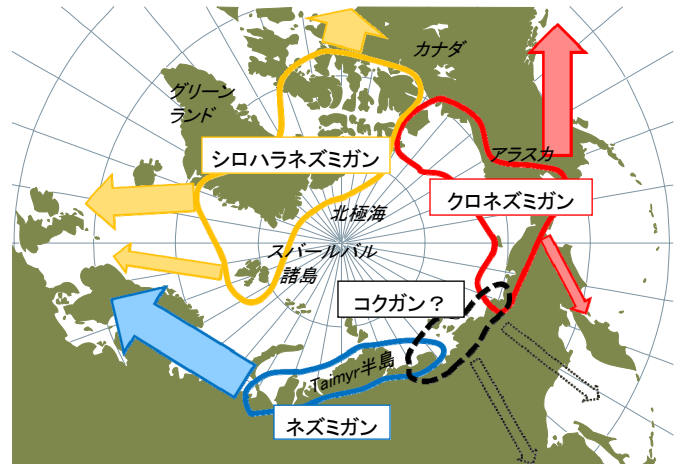
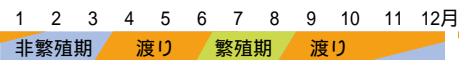


図1. コクガンの亜種の分布。線で囲まれた範囲が繁殖地、矢印は越冬地への渡り方向。

### 生息環境:

他のガン類と比較して親海性が高く、内陸の河川や湖水より、内湾や漁港・沿岸などを好む。北極圏ツンドラ地帯では、浅い汽水湖の中州や岬の比較的海辺に近い環境で、大小のコロニーを形成して繁殖する。ハクガンやホンケワタガモとの混成コロニーで繁殖する事も報告されている。ホッキョクギツネの捕食圧を避ける為に、シロフクロウやハヤブサなどの猛禽類の営巣場所の近くで営巣する事が多い(Dorogoi 1981)。

## 3. 生活史



### 繁殖システム:

一夫一妻で、ペアは生涯続く(Dorogoi 1981)。

### 巣:

巣は浅いくぼ地やコケの中にあり、産座の巣材は主に綿羽で、正羽が混ざる。周辺の植物の状況により、巣の周りにはイネ科草本の枯茎で固められている。

### 卵:

産卵は6月中旬より始まり、産卵数は2~5、平均4.3卵。卵サイズは長径61.5~75.5mm、短径41.8~49.1mm、重量76.5~87.5g (Dorogoi 1981)。卵色はくすんだ白色。

### 抱卵・育雛期間:

6月上旬には営巣地に到着し営巣を始める。抱卵期間は22~24日で、主にメスが抱卵する。最終卵の孵化後は、家族群で採食に適した水辺に移動し、雄雌で協力して世話をする。繁殖後の家族群はそれぞれ独立しているが、7月末までに非繁殖個体が混ざった数家族で群れを作り越冬地へ向かう。翌春には幼鳥は家族を離れ、幼鳥同士の群れで過ごし、満2歳以降に繁殖可能となる(Dorogoi 1981)。

コクガンは年により繁殖成績が大きく変動する。その要因は、6月の繁殖地の気温や積雪量、レミングの個体数の増減によるシロフクロウの営巣数(ホッキョクギツネからの巣への防衛に関わる)に関係し、3年サイクルで上下する傾向が見られる(Dorogoi 1981)。

**渡り:**

幼鳥を連れた繁殖個体は7月末までに他の家族群と一緒に、8月上旬には換羽が終わって飛べるようになる。その後、8月中旬以降に営巣地を離れる。早ければ10月中旬頃から北海道東部のアマモの藻場が発達した内湾に渡来し、多い年には6,000羽以上に達する。また、北方領土の国後島ケラムイ崎にも250羽程度が渡来する。

湾内の凍結が進む12月下旬以降は、少数の越冬群を除いて南下し、北海道南部・本州北部の沿岸を中心に日本各地で越冬する。道東コクガンネットワークによる2015年冬季の一斉カウントでは2,000羽以上が記録されている。

冬季に各地で記録される越冬数は、秋季に北海道東部で観察される渡来数の半分ほどである。残りの消息不明のコクガンは、長大な日本の海岸線に小群で分散して越冬しているのかもしれない。また、韓国南部で100羽程、中国南部で4,000~5,000羽 (Syroechkovskiy 2006)が越冬していることが知られており、その個体群が北海道東部を経由するために秋季の渡来数が多くなっている可能性もある。

春には、3月下旬より北海道東部に2,000~3,000羽が渡来して5月上旬まで見られるが、秋の渡りの半分程の羽数なので、春は北海道東部を経由せず、大陸を直接的に北上するルートも考えられる。

**4. 食性と採食行動**

植物食。潮間帯の植物、特にアマモ類を採食し、海藻類、塩生湿地帯の植物も食べる。上陸してイネ科植物を食べる例も観察されている。ヨーロッパでは、海岸に比較的近い牧草地や畑作地の穀物類への食害も起こっている。

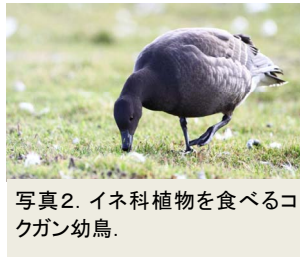


写真2. イネ科植物を食べるコクガン幼鳥。

**5. 興味深い生態や行動、保護上の課題****● コクガンはどこから来るのか？**

北米アラスカ北極圏で繁殖する亜種クロネズミガンは、1986年以降35,000羽が標識放鳥されている。その追跡調査によると、多くが北米西海岸を南下し、メキシコまでの広範囲で越冬するが、日本でも9羽が観察されており、一部が日本に渡っていることが判明している(Derksen *et al.* 1996)。また10月にカムチャツカ半島東岸中部にあるマランバヤム潟湖で5,000羽以上が集結しているのが観察されている(Gerasimov & Gerasimov 1995)。その群れが北米からのものなのか東シベリアからのものなのかは分からないが、地理的な条件を考えるとその多くがカムチャツカ半島を経由して日本に渡来している可能性は高い。

しかし、千島列島では国後島ケラムイ崎以外にはコクガンの渡来地が見つかっていないことと、宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団が2014年にGPS発信機を装着し追尾で来た1羽は、サハリン東岸沖を一気に北上し、オホーツク海沿岸のマガダン周辺に到達していることから、北米から日本に渡来するルートと東シベリアから直接渡来する2ルートがある可能性がある。また北米アラスカで繁殖し標識され、

1年目の冬は北米西海岸のメキシコで観察されたが、2年目の冬は日本(南三陸)で観察されている個体もあり(Derksen *et al.* 1996)、越冬地も毎年、同じとは限らない可能性がある。

**● 保護上の課題**

東アジアに渡来するコクガンは世界の生息数の約2%、1万羽程で、最も保護が必要な個体群であるといわれている。1930年代初めに大西洋沿岸域で発生した病気によりアマモが激減し、亜種ネズミガンの個体数は10分の1に減少したといわれているが、病気に限らず、人為的な環境変化でアマモの藻場が消失する事態になれば、東アジアの個体群に大きな影響が出る事は明らかである。東アジアに渡来する希少な個体群を今後も維持するためには、コクガンが安定して生息できる浅い海と海草や海藻の藻場を、周辺林や自然海岸線を含めてこれ以上減少させないように総合的に保全する事が不可欠である。

**6. 引用・参考文献**

- Boyd, H. 1987. Do June temperatures affect the breeding success of Dark-bellied Brent Geese *Branta b. bernicla*? *Bird Study* 34:155-159.
- Davis, J. N. & Deuel, B. E. 2008. BRANT(*Branta bernicla*). *Studies of Western Birds* 1:79-84.
- Derksen, D. V., Bollinger, K. S., Ward, D. H., Sedinger, J. S. & Miyabayashi, Y. 1996. Black brant from Alaska staging and wintering in Japan. *Condor* 98:653-657.
- Dorogoi I. V. 1981. Materials to the biology of the black brant (*Branta bernicla nigricans*). *Ornitologiya* 22:206-208. [藤巻裕蔵(訳). 1999. コクガンの生態に関する資料. 極東の鳥類 16:33-34.]
- 榎本佳樹. 1941. 日本産鳥類の体の大きさ. 日本野鳥の会大阪支部, 大阪.
- Gerasimov, N. N. & Gerasimov, Yu. N. 1995. Present status and perspective of protection of geese in Kamchatka. *Goose Study* No.9:10-14.
- Min, B. Y. & Won P. O. 1976. An offshore winter seabird on the south coast of Korean Peninsula (Mogpo-Wando-Yeosu area). *Journal of the Yamashina Institute for Ornithology* 8:53-67.
- 宮林泰彦. 1989. 世界のコクガンの分布状況. *ワイルドライフレポート* 10:71-74.
- 宮林泰彦. 1989. コクガンの越冬生態. *ワイルドライフレポート* 10:75-81.
- 日本鳥学会(編). 2012. 日本鳥類目録改訂第7版. 日本鳥学会, 三田.
- 沖永壮治. 1989. アラスカ・ユーコン川でのコクガンの繁殖生態. *ワイルドライフレポート* 10:68-70.
- Summers, R. W. & Underhill, L. G. 1987. Factors related to breeding production of Brent Geese *Branta b. bernicla* and waders (Charadrii) on the Taimyr Peninsula. *Bird Study* 34:161-171.
- Syroechkovskii, E. V. 1977. A colony of geese and ducks near the nests of the snowy owl (*Nyctea scandiaca*) in the Vrangal Island. *Ornitologiya* 13:211-212. [藤巻裕蔵(訳). 1999. ウランゲル島におけるシロフクロウの巣周辺のガンカモ類コロニー. 極東の鳥類 16:45-46.]
- Syroechkovskiy, E. E. Jr. 2006. Long-term declines in Arctic goose populations in eastern Asia. In: Boere G. C., Galbraith C. A. & Stroud D. A. (eds) *Water around the world*. The Stationery Office, Edinburgh, pp. 649-662.
- Ward, R. M. 2004. Dark-bellied Brent Goose *Branta bernicla bernicla* in Britain, 1960/61-1999/2000. *WWT/JNCC Waterbird Review Series*, Slimbridge.

**執筆者**

藤井 薫 道東コクガンネットワーク事務局

北海道東部の野付半島で、シマアオジが渡来しなくなった事を契機に半島全域のカウント調査を実施し12年目を迎えた。現在、道東コクガンネットワークの事務局を担当しているが、本来は同じ黒い鳥でもワタリガラスを研究対象としている。



図書紹介

ツバメの謎

北村 亘 著 / 誠文堂新光社 定価 1,500円 (税別)



著者の北村亘さんたちのグループは、千葉県富津市の牛舎で7年にわたるツバメの調査を行っており、研究成果は論文としても発表されているのですが、本書はその概要を一般向けの読み物として分かりやすくまとめたものです。

ツバメの尾羽が長いのは性選択の結果で、尾の長いオスほどメスにもてるという有名な実験がヨーロッパで行われています。しかし

北村さんたちの調査地のツバメはそうした傾向を示しませんでした。日本のツバメ亜種では別の性選択が行われているのではないかと考えた北村さんたちの調査から、日本のツバメは太っていて、ノドの赤い部分の面積が大きく、はっきりした色をしているオスがモテることが分かってき

ました。このような地域による性選択の違いが、亜種の分化に関わっているようです。

北村さんたちは、さらに夫婦関係の謎にも迫っていきま。仲よく見えるツバメ夫婦ですが、両親とヒナの血液からDNAを分析すると、3割の巣に両親以外の遺伝子を持つヒナが見つかり、牛舎のヒナ全体では15%が「浮気」の結果生まれていることが判明しました。こうしたことが起こるのは、オスとメスがそれぞれの子孫の数を最大にしようと行動するからですが、「浮気」するメスは、前述のようなモテる体型のオスと結婚できなかったメスに多いというのですから、おもしろいものです。さらにメスが浮気をした結果、オスにとっては自分の血を引かないヒナが巣の中になります。なんとオスはそのことを探知して、ヒナへの給餌を減らすことまでするというのです。その仕組みはぜひ本書でお読み下さい。

【神山和夫】

お知らせ

ツバメと人の共存プロジェクトにご支援をお願いします

神山和夫

ツバメは人が集まる場所に巣を作る習性があるため、鉄道の駅や道の駅、サービスエリア、商店街のような場所では多くのツバメが子育てをしているのを見かけます。一方で、ツバメは可愛いけれど、糞が落ちるので困るという声を聞きます。お店や駅などでは、お客さんに糞がかからないか心配で、ツバメの巣を落としてしまふところもあるようです。バードリサーチでは、昔のようにツバメと人が仲よく暮らせる街作りを支援しようと、公共施設や商業施設に働きかけを行っています。

●ツバメ対応マニュアルの配布

巣が落ちたとき、建物で工事があるとき、お客様から鳥インフルエンザの質問を受けたときなど、起こり

お客様からの問い合わせには

ツバメ対応マニュアル

多くの人が、ツバメを心待ちにしています。お家の外には、ツバメの子育ても楽しんでいる人がたくさんいます。ツバメの調査や子育てを応援する一歩として、鳥糞がツバメを悩ませている場所や、鳥糞が落ちてしまふ場所、バードリサーチが配布しているツバメ対応マニュアルを配布しています。

ツバメ対応マニュアル

そうなケースについての対応を説明したマニュアルです。

●ツバメのフン受けの配布

昨年は道の駅や鉄道の駅などに約1000枚のフン受けを配布しました。このフン受けはホームページでも配布しますので、ご希望の方は、まもなくオープンするツバメかんさつ全国ネットワークのサイトをご覧ください。フン受けの製作は㈱シー・アイ・シー様から支援をいただいています。



ツバメのフン受け

●巣立ちアンケート調査の実施

孵化したヒナと、巣立ったヒナの時期と数についてのアンケート調査を実施します。ツバメが来ているお宅の皆様は、ぜひご協力下さい。

以上のようなプロジェクト実施のため、皆様にご寄付をお願いする予定です。詳しくは、四月上旬にリニューアルするツバメかんさつ全国ネットワークのサイトをご覧ください。  
<http://www.tsubame-map.jp/>